

東京音楽大学附属民族音楽研究所刊行物リポジトリ

Title	アジアの発掘口琴チェックリスト(4)：薄板状の口琴(4)と湾曲状の口琴(2)
Title in another language	Asian Excavated Jew's Harps: A Checklist (4) - Lamellate Harps (4) and Bow-shaped Harps (2)
Author(s)	直川 礼緒 (TADAGAWA Leo)
Citation	伝統と創造=Dento to Sozo, Vol. 9, p. 41-56
Date of issue	2020-03-27
ISSN & ISSN-L	Print edition: ISSN 2189-2350, Online edition: ISSN 2189-2482, ISSN-L 2189-2350
URL	http://www.minken1975.com/publication/IE_B09201905.pdf

アジアの発掘口琴チェックリスト(4): 薄板状の口琴(4)と湾曲状の口琴(2) Asian Excavated Jew's Harps: A Checklist(4) - Lamellate Harps(4) and Bow-shaped Harps(2)

直川礼緒 TADAGAWA Leo

ユーラシア大陸を中心に世界中に分布する、始原的な楽器である口琴は、いつごろ、どこで、どのように生まれたのだろうか。これまで「アジアの発掘口琴チェックリスト (1): 薄板状の口琴 (1)」(2016)、「同 (2): 薄板状の口琴 (2)」(2017)、「同 (3): 薄板状の口琴 (3) と湾曲状の口琴 (1)」(2018)で、アジアとその周辺地域で発掘された口琴の確認を行ってきた。

本稿では、さらにその続編として、これまでの稿で論じた、ロシア連邦沿海地方と中国黒竜江省の湾曲状の口琴のより詳しい情報を補完するほか、新たに情報が明らかになった、紀元前 20 世紀頃の中国陝西省の口琴に触れ、山西省、内蒙古自治区、そしてロシア連邦オムスク州の薄板状の口琴を確認する。

また、日本国内で新たにその存在が明らかになった、千葉県木更津市の紀元後 9 世紀末の湾曲状の金属製の口琴も取り上げる。

キーワード: 口琴 Jew's harp、音楽考古学 Music archaeology、
古代楽器 Ancient musical instruments、
北方アジア Northern Asia

音楽考古学の中でも特にアジアの発掘口琴の全般的な研究は、比較的新しい分野であるといえるだろう。2016 年に本稿の第一部を始めた時には全く知られていなかった情報が、毎年わずかずつにはあるが、様々な方面から集まってきている。当初は、薄板上の口琴と湾曲状の口琴それぞれについて、ほぼ年代順に並べれば終わると考えていたのだが、そうもいなくなってきた。全く新たに口琴が発掘された、前稿「アジアの発掘口琴チェックリスト (3)」中の「12. ロシア連邦アルタイ共和国」(2017 年出土) および、本稿中の「16. 中国陝西省 2」(2016~17 年出土) の例や、すでに発掘されていた遺物が実は口琴であったことが再発見される例(本稿中の「20. 日本千葉県」)をはじめ、これまでの稿ですでに言及した発掘口琴に関して、より詳細な情報の存在が判明したり(例えば同「チェックリスト (3)」中の「13. ロシア連邦沿海地方」および「14. 中国黒竜江省」の例に関しての本稿中の「13a. ロシア連邦沿海地方(補遺)」「14a. 中国黒竜江省(補遺)」)、より正確な情報がもたらされたり(例えば、「チェックリスト (2)」中の「9. 韓国」は、実は「チェックリスト (3)」中の「13. ロシア連邦沿海地方」の 2 番目に取り上げた [102] 番の口琴であったことが判明。露・韓共同調査の情報が、最初に韓国側から入ってきた)など、当初目論んでいた「薄板状の口琴を取り上げた後、湾曲状の口琴を検証する」「薄板状・湾曲状のそれぞれを、ほぼ年代順にならべる」「存在の知られている口琴の出土例に通し番号を振る」といった本「チェックリスト」の試みは、すでに崩れはじめています。

本編では、新しい情報を積極的に取り込みつつ、現在確認される限りのアジア(および

周辺部)の発掘口琴をリストアップすることの続け、それぞれの口琴の並べ方や通し番号、図版の通し番号等に関しては、後の再検討の課題としたい。

13a. ロシア連邦沿海地方 Primorsky Krai, Russia [104] (補遺)

一昨年の論考中の「13.ロシア連邦沿海地方」で取り上げた5例の口琴[101~105]のうち、[104]の口琴に関する情報の原典と図版が確認されたので、追加しておきたい。

シャヴクノフによる女真文化の起源に関する論考(Шавкунов 1989)中、シャイギンスキイ土壘から出土した紀元後7-8世紀のこの遺物については、青銅や銀の腕輪に続く文脈の中で、次のようにごくあっさりとしか触れられていない。

「また、次のことにも言及しておかなければならない。すなわち、大きくて重い(massiveな)青銅のヘアピン(図7)が同じ土壘から発見されている。そのスタイルは、新羅と高麗のピンと同じように作られている(参考文献35、図471)」

やはり、当時はヘアピンと認識されていたようである。そこに掲載されている「図7(fig. 38)を見ると、ヘアピン型の枠の底部の厚みの中央に、穴があるのが見て取れる。採寸の記載はなく、「massive」という単語で表現されている大きさや重さが、どれぐらいのものかは不明である。

そして最後に記されている参考文献(Eckardt 1929)の図に当たると、そこには、新羅と高麗の、金と銀のヘアピンの写真(fig. 39)が掲載されていた。確かにシャイギンスキイ土壘の遺物と外見は非常によく似ている。しかしながら、これらの遺物のうち、シャイギンスキイ土壘のものは口琴の可能性が高く、他のものはヘアピンである、とする場合の決め手は何だろうか。



fig. 38 ロシア連邦沿海地方シャイギンスキイ土壘出土の湾曲状の口琴の図[104]。シャヴクノフ 1989より



fig. 39 新羅と高麗の金と銀のヘアピン。エッカート1929より

その一つは、「枠に施された、振動弁を接合するための仕掛け」の存在の有無だろう。シャイギンスキイ土壘の物は、明らかに枠の底部中央に穴が開いており、この穴に振動弁を通してとめたのではないかと想像がつく。このような、枠の厚みの中央に穴を開けて振動弁をとめる方式は、考古例としてはエストニアやドイツ、デンマークなどに見られ(Kolltveit 2006:68-69)⁷⁹、また民族例としてノルウェーやシチリアなどに見られるが、女真時代や、その後の沿海地方にどの程度広まっていたのかは、注意深く検証する必要がある。この点、ヘアピンであることが明白な遺物には、このような仕掛けが見当たらない(写真中に一点、枠の基部に穴が開いているものがあるが、向きや角度などから、この穴が振動弁を固定

するためのものであると考えるのは無理だろう)。なお、このシャイギンスキイ土塁の遺物の場合、穴が少々小さく、丸く表現されているのが、薄くて平らな振動弁を固定するのに役に立つのか、少々疑問が残る。丸い鋼の棒（自転車のスポークや、傘の骨を想像していただきたい）を、枠より内側に相当する部分は平らに成型し、丸棒のままの部分はこの穴に差し込む、という手法も考えられなくはないが、これだと、弁が容易に回転してしまい、正しい振動が得られない恐れがある。もし、わずかにでも振動弁が残存していれば、口琴である可能性はもっと高くなっていたことだろう。

もう一つの決め手は、枠の腕部の断面が、◆◆（弁と向き合う位置にエッジが形成されている）か■ ■（弁と向き合う位置に、エッジがない）か、という点だろう。ただし、発掘例（イギリス、Kolltveit の [181]）や民族例（イタリアのアルミ製のものや、ムックリなど）には、■ ■のタイプのものも少数ながら存在しているため、◆◆でないから、といって口琴ではない、と決めつけることはできないのではあるが。金属の角材を、エッジを内側で向き合う状態にするには、稜線の通った方向に、すなわち曲げにくい方向に曲げたり、途中で45度捻ったり、あるいは削り出したり、といった余計な製作過程上の手間が要求される。それにもかかわらず、世界の大多数の口琴には、このエッジの向きや角度に関して、様々な配慮が施されているのが見られる。枠と弁との間に形づくられる隙間こそが、口琴の音のもととなる最も重要な部分だからである。シャイギンスキイ土塁の遺物には、明らかにエッジを立ててあるのが見られ、新羅と高麗のヘアピンには、そのような工夫は見られない。外見はよく似ているが、シャイギンスキイ土塁の遺物は、ヘアピンとは別の目的を持って作られたものであり、おそらく口琴の可能性が高い、とするのが妥当だろう。

14a. 中国黒竜江省 Heilongjiang Province, China [106]（補遺）

同じく一昨年論考中の「14. 中国黒竜江省」で取り上げた [106] の口琴に関する情報の原典（黒竜江省文物考古研究所，中国社会科学院考古研究所 2006）も確認されたので、追加しておく。

同仁遺跡は、黒竜江省東北部の三江平原、すなわち黒竜江と松花江の合流地帯に位置する。黒竜江省鶴崗市綏濱県の北方、県人民政府の所在地である綏濱鎮からは45kmの所にある。黒竜江（アムール川）を挟んで北隣はロシアであるが、「13. ロシア連邦沿海地方」中の5例の口琴 [101-105] の発掘されたウラジオストク近辺からみると、北に位置している。紀元後5～11世紀の同仁文化の遺跡で、黒水靺鞨と関係するらしい。

写真は無いものの、実測図 (fig. 40) が掲載されており、その形状、特に腕部において枠と振動弁との関係が◆—◆となっていることから、明らかに口琴であると考えられるが、本文中の解説では「III式鉄釘」として「釘」に分類されている。「四つの角を

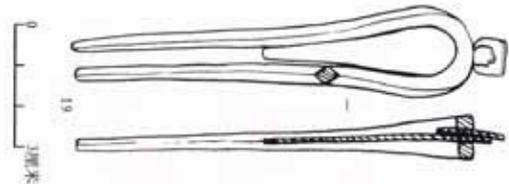


fig. 40 中国黒竜江省鶴崗市綏濱県同仁遺跡出土の湾曲状の口琴の実測図 [106]。黒竜江省文物考古研究所，中国社会科学院考古研究所 2006 より

持つ菱形の鉄材を曲げて腕部を作り、中央に薄くて細長い鉄を挿入し、さらに薄片を差し込んでとめてある。長さは110mm」とのことである。実測図の寸法をもとにすると、最大幅は約24.3mmといったところか。杵の形状は、ヘアピン型ではなく、細長いしずく型の環状部を持つ。振動弁は、中央あたりから先が失われている。

先の[104]で論じた、振動弁の杵への接合方法が、まさに「杵の厚さの中央に穴を開け、振動弁を差し込み、楔でとめる」方式となっているのが、実測図の側面図を見てもよくわかる。この点に関して、前稿（直川 2017）で取り上げた沿海地方の口琴を改めて見直してみると、[101]はおそらく「ホゾ穴を作ってそこに弁を差し込み、杵を叩き潰してカシメでとめる」方式、[102]は側面図や側面からの写真を見ると振動弁が、杵の厚みの中央付近に突き出していることから、穴に通している方法（ただし楔でとめてあるかどうかは確認できない）ではないかと思われる。[103][105]に関しては、写真からだけでは様子の確認が不可能である。

この[106]の大きな特徴として、振動弁、特にその根元の形状が挙げられる。杵の環状部にぴったりと沿うように、楕円形に成形されているのである。この点は、ロシア沿海地方のアヌチノ地区出土の口琴[105]と共通している。振動弁と杵との隙間は、口に当てる先端に近い部分（いわゆるアンブシュア部）でこそ精密に作らないとよい音が得られないが、わざわざ手間をかけて、杵の環状部でも隙間を狭くするのは何のためだろうか。課題のひとつとして心に留めておきたい。

同仁文化の出土品は、一般にアムール川（黒龍江）中下流域の靺鞨文化（4～9世紀）や、樺太、北海道の北海岸に栄えたオホーツク文化（3～13世紀、北海道内では5～9世紀）の遺跡から出土する、帯飾り、軟玉、小鐸、鉦などが共通しており、これらの文化間で交流が行われていた⁸⁰、とのことなので、埼玉県[107～109]や千葉県[110]（後述）といった、9世紀末～10世紀初頭の関東地方の湾曲状の口琴や、アイヌ民族の鉄製口琴、そして江戸～明治時代に存在していた津軽の鉄製口琴「口琵琶」を考える上でも興味深い（しかしながら、オホーツク文化の遺跡から口琴が出土した、という情報はまだない）。

16. 中国陝西省 2 Shaanxi, China 2 [57 ~ 79 (仮)]

陝西省の口琴ケース（と考えられる墨書竹筒）[14]については、「8. 中国陝西省」で取り上げた（直川 2017）が、同じ陝西省から、全く新しく口琴が発掘されたという情報が入ったのは、2018年5月22日のこと。陝西省北部の榆林市神木市にある石峁（シーマオ）遺跡から、紀元前20世紀の骨製の口琴が、20本余りも発掘された、というのであった。陝西省考古研究院の発表に伴い、その後数日間に渡って中国国内で数多くの報道がなされ⁸¹、日本でもNHK BSの世界のニュースで放映された。

ぜひ現地を訪れて、実物を見てみたい、発掘現場に立てるものなら立ってみたい、と思っていた矢先、現地で発掘された口琴をテーマにシンポジウムをやるので参加しないか、というお誘いが来たのが2019年7月の終わり。中国貴州省出身で日本在住の口琴奏者・王珊さん、本稿に何度も名前の登場するノルウェーの口琴考古学者イェルムンド・コルトヴェイト Gjermond Kolltveit、そしてハンガリーの口琴奏者／ケチケメート楽器博物

館館長アーロン シラーヂ Áron Szilágyi と一緒に参加することも決まり、9月17日(火)、北京経由で中国内蒙古自治区の鄂爾多斯(オルドス)に向かっていた。会場となる神木市へは、陝西省の首都である西安から入るよりも、オルドスから車で南下する方が速くて便利、ということであった。

オルドスでは、博物館や、チンギスハーン陵などを訪問して過ごし、神木市に到着したのが19日(木)の午後2時過ぎ。すでに到着していた、雲南省、寧夏回族自治区、北京などからの口琴奏者、研究者たち(中には旧知の顔も)が、「今から口琴の発掘された石峁遺跡に行くところ」だということで、荷物を置くのもそこそこに参加する。15名ほどで主催者の手配した車に分乗、神木市内から一時間程度走ったところにある高家堡古鎮という古い町並みに到着。そこから細い山道を登り始めてしばらくいくと、今から4000年以上前、竜山時代後期から夏王朝初期の中国北方の超大型都市とされる、石峁遺跡に到着。まずは東門にある事務所で、遺跡に関するビデオを見る。そして、屋根のある発掘現場を見学。生贄と考えられる少女の頭蓋骨が、多数固まって発掘されている現場などがある。口琴はどこで見つけたのかと聞くと、かなたを指差し、「あちらの皇城台で」とのことである。そして、心躍ることに、今からそちらにも行くという。

到着した皇城台(fig. 41)は、ピラミッド状の巨大な石積みの都市遺構であり、玉器、陶器、壁画など様々な遺物が発掘されている。また、一万本を超える骨針、錐、鏃、卜骨、そして骨笛や口琴といった骨製品や、材料の骨類や未完成品、廃棄品、石刀、砥石など骨器製造に必要な工具類がまとめて発掘されており、この遺跡の責任者である陝西省考古研究院院長の孫周勇先生によれば、古代の骨器工房の存在が考えられる



fig. 41 石峁遺跡皇城台



fig. 42 中国陝西省榆林市神木市石峁遺跡出土の薄板状の口琴 [57(仮)]. 写真提供：中国社会科学院范子焯教授



fig. 43 同 [58-66(仮)]. 写真提供：中国社会科学院范子焯教授



fig. 44 口琴発掘場所は、写真ほぼ中央のテラス状の場所



fig. 45 この円形のところから口琴がまとめて発掘された



fig. 46 口琴国際シンポジウムに伴って開催されたコンサート



fig. 47 神木市博物館の入り口



fig. 48 石峯遺跡。左の緑のランプが皇城台、中央やや奥の青いランプが外城東門。神木市博物館のジオラマより

とのこと。まずそれらの貴重な出土品を保管した収蔵庫に案内される。そこには、骨製の薄板状の口琴も6本展示されていた。残念ながら、撮影は禁止であったので、本稿では、シンポジウム実行委員会の主要メンバーである、中国社会科学院文学研究所の范子焯先生提供の写真(fig. 42, 43)を挙げるにとどめる。口琴は、合計23本発掘されたとのことであつたので、写真に見られるものをそれぞれ仮に[57][58~66]とする。それ以外の13本がどのような形状なのか、詳細は、孫先生の論文の出版を待つ必要があるが、その分の番号として[67~79]を空けて備えておきたい。

それしても、非常にユニークなデザイン性に富む口琴の一群である。完全な状態のものは少なく、破損したものの残欠が多い、という印象ではあるが、枠の縁取りに刻み模様を入れたもの、線刻を施したもの、装飾の穴を開けたもの等々、単純な長方形のものは一つとしてない。

4000年前の口琴6本と感動の対面を果たし、あとは皇城台を柵の外から眺めておしまいか、と思っていたら左にあらず。なんと、柵の中に入り、皇城台に登ることが許されたのだ。取材班が入り、口琴奏者それぞれに、さまざまなロケーションで演奏を要求される。あまりにあわただしく、ホテルに預けた荷物に口琴を全て入れたまま来ていた筆者は、以前からの知り合いの雲南省の口琴奏者・陳志鵬氏に、日本人製作者⁸²が作った楽器を借りて演奏した。この取材の後、見事な彫刻が露出した部分などを横目に見ながら頂上を過ぎ、口琴が発掘された場所(fig. 44, 45)に立つことができた。何段かのテラス状の構造のうち、上の方のテラスが崩落した時に、まとめて発見されたそうだ。

翌9月20日(金)、公式なプログラムの開始である。23日までの4日間、神木市のホテル楊城華府酒店で開催された、発掘口琴をテーマにした国際シンポジウム「石峯皇城台考古新発見暨口簧国際研討会」は、予想をはるかに超える盛大なもので、中国各地から100名を超える参

加者（国外からは我々を含め5名）があった⁸³。

21日（土）の午前中は、開会式の後、基調講演が4本。2番目に発表した孫先生の発表のタイトルは「早期口簧的考古発現與研究」。4番目の方建軍先生の発表は、「石峁口簧的音楽歴史意義」というタイトルで、神話上の女媧が「簧（＝口琴）」を作ったという逸話や、口琴演奏の民族例を挙げたものであった。他のお二人の研究発表は、皇城台全体に関する考古学的なもの、炭素14年代測定法に関するものであった。

午後は、再び石峁遺跡へ。今度は、シンポジウムの参加者の公式訪問である。大型バス3台を連ねての大人数での訪問であったため、前回のような落ち着いた雰囲気ではなかったが、一度目の訪問のおかげである程度ポイントを心得ていたため、一人口琴発掘現場に向かい、気持ちのよい風に吹かれながら、4000年前の口琴の余韻を味わった。そして、今度は忘れずに持参した口琴も演奏してみた。現時点で世界最古のひとつ（一群）とされる口琴を作った、石峁遺跡皇城台の人々は、どうしてこの楽器を思いつき、いろいろなデザインのものを作り、どんな演奏をしていたのだろうか。

この日の夜は、神木市内の「大劇院」での口琴コンサート。石峁遺跡と口琴を称える詩の朗読から始まり、地元の芸能を間に挟みつつ、中国国内、そして外国から集まった口琴奏者が、巨大なホールで演奏を行った（fig. 46）。

21日（日）は、早朝から考古組と音楽組の二部屋に分かれての発表。筆者も、本「チェックリスト」に基づく、アジアの発掘口琴の報告を行った。

この日の午後のエクスカージョンでは、筆者は、市内の神木市博物館訪問を選んだ。博物館の入り口に立つ、鷹の嘴と大きな角を持つ金色の動物のモニュメント（fig. 47）は、神木市納林高兔村で出土した戦国時代の匈奴の遺物をモチーフにしたもので、まさに南シベリアのトゥヴァやアルタイに見られる発掘品と共通している。また展示品の中には、石峁遺跡のジオラマ（fig. 48）もあり、遺跡の全体像と、皇城台や東城門の位置関係を俯瞰的に見ることもできた。

シンポジウム終了後の22日には、車で2時間ほどの榆林市を訪れ、「万里長城第一台」に行ってみた。黄河の西側のこの一帯は、古来、北と南の文化がせめぎ合う地であったのだ、ということをあらためて実感した。

17. 中国山西省 Shanxi, China [80]

陝西省の、黄河をはさんで東隣にあるのが山西省である。山西省南部に位置する臨汾市襄汾県にある陶寺遺跡から、骨製の薄板状の口琴 [80] が発掘されている。

陶寺遺跡は、それまで伝説とされてきた「堯の都」だと考えられ、建設されたのは今から4000～4300年前。王宮と外郭、下層の貴族居住区、倉庫、王族の墓地（王陵）、天文観測・祭祀用の壇、手工業に用いられる作業部屋、庶民居住区によって構成され、紀元前の中国で最も機能が整った都だとのこと⁸⁴。

詳細な報告書は、『襄汾陶寺：1978～1985年考古発掘報告』（中国社会科学院考古研究所山西隊、山西省臨汾市文物旅游局2015）を参照すべきであろうが、未見。1978年に始まった発掘調査40周年を記念して、五千件を超える発掘品の中から300件ほどを選んで、出

版された『中国陶寺遺址出土文物集萃』（中国社会科学院考古研究所，臨汾市旅游發展委員會 編著 2018）には、一点の薄板状の骨製の口琴の写真が掲載されている（fig. 49）⁸⁵。そこに付されたキャプションは至って簡素で、「口弦琴 81JS62 III T422J401:29」という整理番号らしきものと、「全長 84mm、幅 13mm、厚さ 1mm」というサイズが記されているのみで、本文中に解説はない。

形状は、両端に突起が合計 4 つある、独特なデザイン。振動弁の付け根側の枠に、紐を結ぶための穴が開けられている。年代は、陝西省考古研究院の孫先生によれば、紀元前 1900 年頃とのことであり、また陝西省の石峁遺跡からは 300km 程度しか離れておらず、時間的にも空間的にも近い。おそらく何らかの関係があったのではないかと考えられる。この楽器についても、今後さらに情報を集めたい。



fig. 49 中国山西省臨汾市襄汾県にある陶寺遺址出土の薄板状の口琴 [80]。中国社会科学院考古研究所，臨汾市旅游發展委員會 編著 2018 より

18. 中国内蒙古自治区 2 Inner Mongolia, China 2 [81]

内蒙古自治区赤峰市の骨製の薄板状の口琴 [01] については、「1. 中国内蒙古自治区」（直川 2016）ですでに述べたが、同じ赤峰市の、市内からは 120km ほど北東に離れた場所にある克什克騰（ヘシグテン）旗にある龍頭山遺跡という場所で、骨製の薄板状の口琴がもう一本出土していたことが分かった⁸⁶。

龍頭山遺跡は、西周から戦国時代にかけての夏家店上層文化の遺跡で、1986 年から 1991 年にかけて調査が行われた。その中で発掘されたと思われる口琴 [81] については、『赤峰文化遺産』（陳永志、吉平、張文平 主編 2014）に、銅剣や骨製の錐などと一緒に撮影された写真（fig. 50）が掲載されているだけで、その解説中には言及がない。この遺物が口琴

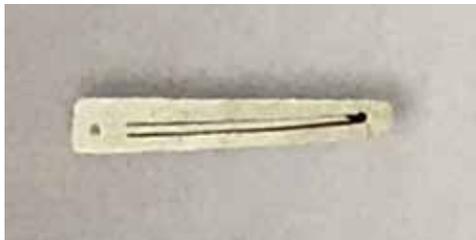


fig. 50 中国内蒙古赤峰市龍頭山遺跡出土の薄板状の口琴 [81]。陳永志、吉平、張文平 主編 2014 より

である、という記載も、採寸もない。楽器の形状は、細長い等脚台形に近い薄板に、細めの振動弁が切り出してあり、弁の根本側の枠に、紐を取り付けるための穴が開いている。

この遺跡に関する報告書が存在するのかどうか、そこに口琴の情報が載っているのかどうか、そして [01] とどのような関係にあるのか、等を調べるのも、今後の課題である。

19. ロシア連邦オムスク州 Omsk Oblast, Russia [82, 83]

西シベリア西南部、カザフスタンと国境を接するオムスク州のイルティシ川（イルティシュ川、エルティシ川とも）中流域にある、キポ - クラル - Ш⁸⁷ Кипо-Кулар-Ш という

遺跡から、骨製の薄板状の口琴 [82] が発掘されている⁸⁸。

コニコフ (Кони́ков 1996) によれば、「1982年にオムスク教育大学の調査で発掘された、同州テヴリズ地区のキポ-クラル-III 遺跡は、紀元前 5-2 世紀(下層)と、紀元後 11-12 世紀(上層)の二層からなる。口琴はウスチ-イシム文化に属する上層の、住居と住居の間の空間から出土した。長方形に近い形で、全長 123mm、幅 9-15mm、厚さ 0.2mm⁸⁹。一方の端はもともと折れている。細く切り出された振動弁の長さは 53mm。表面に二か所、磨いた跡がある。」とのことである。

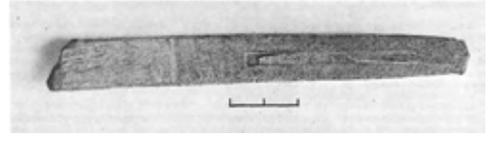


fig.51 ロシア連邦 オムスク州 キポ-クラル-III 遺跡の口琴 [82]。コニコフ 1996 より

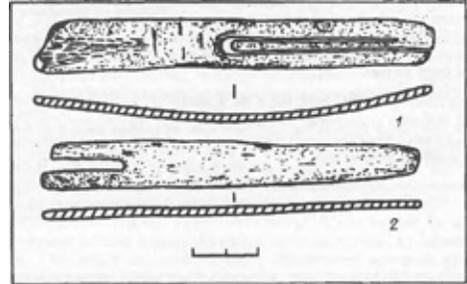


fig. 52 ロシア連邦 キポ-クラル-III 遺跡とアクショーノヴォ-II 土塁出の口琴 [82, 83]。コニコフ1996 より

この口琴 (fig. 51, 52-1) の大きな特徴は、「弁を振動させるための引き紐」を取り付ける穴がないこと、そして「持ち手」がしっかりとした厚みを持って、長く (折れているとはいえ) 形作られ

ている点である。これらのことから、この楽器はバシコルトスタン共和国の [16] や、カマ川流域の [17~51] (直川 2017) のうちの多くの例と同じく、「杵を弾くことによって、振動弁を振動させる」A1 タイプ (直川 2016) の口琴である、ということができよう。このタイプの口琴が、ウラル山脈の東側、アジア地域に属するオムスク州にも存在した、ということは、大きな意義があると思われる。

関連してコニコフは、キポ-クラル-III 遺跡から北に 6km ほどの距離にある、アクショーノヴォ-II Аксёново-II 土塁の、同時代・同文化層から発掘された、長方形に近い形の骨の薄板 (fig. 52-2) にも言及し、「口琴の製作段階かもしれない」としている [83]。これが本当に口琴の製作段階、あるいは残欠であるとするれば、キポ-クラル-III の例が特殊な例ではなく、この地域にある程度根付いたタイプであったことの傍証となるだろう。

20. 日本 千葉県 Chiba Prefecture, Japan [110]

これまで日本で発掘された口琴は、湾曲状の鉄製の物が、埼玉県大宮市 (現さいたま市大宮区) の氷川神社東遺跡から 2 例 [107, 108]、同羽生市の屋敷裏遺跡から 1 例 [109] の、合計 3 例が知られているのみであった⁹⁰。さらに新たに、口琴らしいものが発掘されている、という報がもたらされたのは、2019年3月5日のことであった。以前、屋敷裏遺跡の口琴の情報を教えてくださった、埼玉県埋蔵文化財調査事業団の渡辺清志氏が、「同僚の方が別件で調べ物をしている最中に、千葉県木更津市の花山遺跡の報告書の中に、羽生の口琴とよく似た遺物が掲載されているのに気が付いた」ということで、連絡をくださったのである。

早速、報告書 (平野 編 1988) を見てみると、「環状部を持つ口琴の杵とよく似た形の、

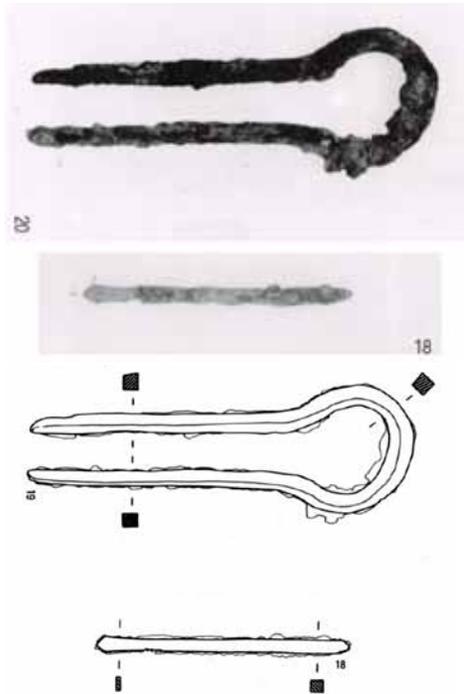


fig. 53, 54 日本千葉県木更津市花山遺跡出土の湾曲状の口琴の杵（上）と振動弁？（下）の写真と実測図。平野雅之 編 1988 より



fig. 55 同上。2019年5月29日筆者撮影(以下同様)



fig. 56 杵の腕部先端方向から環状部底部を観察する

二股のもの」が確認できた (fig. 53 の 20 番および fig. 54 の 19 番)⁹¹。そのすぐ近くには「振動弁であるかもしれないもの」もある (同, 18 番)。しかし、本文中に記述や解説は一切なく、これらの遺物が何だと考えられていたのか、また素材は何なのかもわからない。用途不明品であることさえも記載されておらず、図版がぼん、と提示されているだけである⁹²。報告書からわかる、この二点の遺物に関する情報は、出土箇所の図から読み取れる。「19 番（および 20 番）の遺物が、28 号住居址の北側にある、竈のそばから出土している」とことのみ。18 番の方は、出土地点も記されていない。

実測図や写真を観察すると、口琴の杵の可能性があるとと思われる遺物は、角材を、全体に稜線が通る方向に曲げてあり、腕部での断面の◆◆の条件を完全に満たしている（実測図中の、腕部の断面の表現は■ ■となっているが、明らかに何らかの間違いだろう）。しかしながら、振動弁は全く残っておらず、取り付けられていた跡さえ見当たらない。裏側を見ると何らかの痕跡があるだろうか？そもそもこれは鉄製品なのだろうか？

一方の、振動弁の可能性があるとと思われる 18 番の遺物は、左端付近の断面が薄板上になっているが、右端付近では、正方形に描かれている。口琴の振動弁は、全体に薄い板状になっているのが普通だが、重さをつけるため意図している場合や、技術的な問題で意図せずにこの様な状態になっていることも、考えられないわけではない。せめてこれが鋼でできていることが記されていれば、振動弁で間違いのない、といってもいいのだが…。ともかく実見してみなければ何も言えないと、木更津市教育委員会に連絡をとり、熟覧の許可をいただき、2019年5月29日と8月5日の2度に渡って潮見資料庫を訪問、この遺物を観察する機会を得た⁹³。

まず、すぐに確認できたのは、鉄製品であること (fig. 55)。杵の方は、19 番が正しい番号であるらしい。18・19 の両遺物が、同じケースに

保管されており、発掘関係者の間でも、この二点に何らかの関係性を認めていたのではないかと想像されるが、単にサイズの近い鉄製品と一緒に保管したのかも知れず、何ともいえない。どちらも赤錆がかなり出ており、剥離した錆もかなり多い。また、報告書に掲載された写真が撮られたときとは違って、杵の方は二つに折れている。もう一方の小型の遺物は、少なくとも三つに折れている。

肝心の、振動弁の痕跡であるが、杵の環状部の底部を、腕部側から観察すると、「扁平な六角形の、中空のように見えるもの」が折れたあとが確認できた (fig. 56 ~ 57)。接合の方法は、錆のため明確には不明だが、おそらくホゾ穴を切って、そこに弁を差し込み、カシメてとめてあると思われる。この、環状部の底部中央に残されていた、弁の痕跡によって、ほぼ確実に、この遺物が口琴の杵であり、他の用途のために作られたものではない、という確証が得られた。

もう一点のポイントである、杵の断面の形状も、杵が折れていることが不幸中の幸いというべきか、正方形に近く形作られているものが、45度回転させた状態◆になっていることがはっきりと確認できる (fig. 58)。

そしてさらにもう一点、アンブシュア部（口に当てる部分、音の源となる隙間があるあたり）で振動弁と杵との位置関係を合わせるために、杵を横から見たときにわずかに「へ」の字に曲がってあることが観察できる (fig. 59)。このことから、この口琴を作った人は、どのようにしたらより良い音が出るのかを意識して、工夫しながら製作したのであろう、ということがわかる。

報告書の実測図のもととなった、方眼入りの原図を見せていただき、その採寸の結果は、全長約 147mm、最大幅約 50mm。弁らしきものは、全長約 98mm、幅約 5mm。特に杵の大きさは、羽生の口琴が 148×54mm であるので、かなり近いということができる。

花山遺跡は、東京湾側から少々内陸に入った、木更津市矢那字花山というところにあり、市立



fig. 57 環状部底部中央付近に、振動弁の折れた後が見られる。断面の形状は平らな六角形で、中空になっている。折れ口の弁の幅は 6 ~ 7mm



fig. 58 長い方の杵の部品の折れ口。ほぼ正方形の断面が、45度回転している



fig. 59 杵を側面から見ると、わずかに「へ」の字型に曲がっている



fig. 60 3つに折れた振動弁？の断面

鎌足中学校の建物を新たに建設する際に、発掘調査が行われた。予備調査が1980年度（1980年9月から1981年2月）、本調査が1982年9月から1984年12月までであった。この中で、口琴が発掘されたのは1983年1月20日であることが、保管ケースのラベルから分かった。大宮の口琴よりも5年も前に発掘されていたが、その後36年間に渡って存在さえもわからなかったのだ。それが、今やっと日の光のもとに現れた感がある。遺跡からは、先土器時代から平安時代にかけての遺物が出土しており、口琴は、近くから発掘された土器の様式から、9世紀後半と考えられる、とのことであった⁹⁴。これは、大宮の10世紀前半、羽生の10世紀の最初の四半世紀、という年代と同時代（そして現時点で日本最古）といて差し支えないであろう。

5月の木更津訪問の際には、口琴の出土現場も訪れてみた。海岸から約10km弱の内陸、現在、市立鎌足中学校の立つその場所は、こんもりとした山をさらに一段登ったところにあった（fig. 61）。校長先生自らのご案内で、報告書の図面を頼りに、口琴が出土した第28号住居址のあったあたりに立ってみる。ちょうど体育館（fig. 62）の裏手、中学校の敷地の北の端に近いあたりである。このような場所で、1000年前に口琴を演奏していた人がいたのだ。その後、校庭にまわり、「鎌足桜」を見学したのち、校長先生のご希望により、校庭にいた生徒たちの前で口琴を演奏して見せた。もしかしたら、平安時代の口琴奏者の末裔が、このこどもたちの中にいるのかもしれない、などと夢想しながら音を探った。

日本で4例目の口琴が見つかったことによって、平安時代、9世紀の終わりから10世紀の終わりにかけて、埼玉県と千葉県に口琴文化が存在していたことが明らかになってきた。そして、大宮の口琴が発掘された際に、全国報道されたりしたこともあり、口琴の考古学界における知名度はある程度上がったのではないかと思っていたが、この木更津の例のように、全く存在が無視されていた出土口琴というものが存在する、という事実にも直面した。日本の他地域でも、もしかしたら同じような口琴の発掘例がまだあるのではないだろうか。

この木更津の口琴[109]については、新たに報告書も作られ、保存処理も行われるという情報が入ってきている。公式な採寸や、年代測定なども発表されると思われる。今後の展開に期待したい。

第4部のおわりに

次稿では引き続き、前回図版を紹介した3本の10世紀の日本の口琴の詳細情報確認、



fig. 61 花山遺跡は、こんもりした丘の上にある



fig. 62 鎌足中学体育館。裏手の下あたりで、口琴が発掘された

ロシア連邦ケメロヴォ州のエサウルスキイ古墳群の突厥?の遺跡から出土した7-8世紀の遺物の検証、そしてアルタイ、サハ、バシコルトスタンなどに点在する、17世紀頃以降の比較的新しい時代の発掘品を採り上げる予定。

註：

- 79 イェルムンドは「楔どめ wedged」と呼んでいるが、枠の厚みの中央付近に穴を開ける場合、別の金属片を差し込んで止める「楔どめ」の他にも、枠全体を叩いて潰すことによって、振動弁を固定する方法もある（シチリアなど）ので、一考を要する。
- 80 例えば、「北海道歴史・文化ポータルサイト AKARENGA あかれんが」中の「オホーツク文化」の項。<https://www.akarenga-h.jp/hokkaido/jomon/j-05/>(参照 2020-01-15)。
- 81 例えば、「四千年前の口弦琴長啥样？」鳳凰藝術 <http://wap.art.ifeng.com/?app=system&controller=artmobile&action=content&contentid=3422563> (参照 2020-01-15)。
- 82 山形県の山崎隆史氏。
- 83 シンポジウムへの参加にあたって、また滞在中は、口琴奏者の王珊さんはもとより、口琴奏者の陳志鵬氏、中国社会科学院文学研究所の范子焯先生、天津音楽学院の方建軍先生 ([14] 陝西省の口琴ケース参照)、雲南省彝族の口琴奏者・馬国国先生、寧夏回族自治区の口琴奏者・製作者の安宇歌先生と李旭氏の親子、内蒙古自治区の口琴奏者・文麗（スイラサイハン）さんやホーミー唱者・岱欽氏、馬頭琴奏者・孟子克那僧氏をはじめとする、沢山の方々に大変お世話になった。心からお礼申し上げます。
- 84 「山西省・陶寺遺跡、伝説の『堯の都』か」 Science Portal China 2015.6.26 https://spc.jst.go.jp/news/150604/topic_4_02.html (参照 2020-01-15)。
- 85 この情報は、もう一人の国外からのシンポジウム参加者、UCLA Cotsen Institute of Archaeology の Kirie Stromberg 氏にご教示いただいた。
- 86 この情報は、Төрбар, Ц. 2017 に記載されていた。この論文の内容は、モンゴル語のため詳細は未確認であるが、図版等から判断すると直川 2016 からの情報を多く使用している模様。単なる翻訳に留まらず、このように新たな情報を入れていただくことは、とてもありがたい。なお、本論文の掲載紙の入手に当たっては、モンゴル科学アカデミー歴史考古研究所のロチン イシツェレン Лочин Ишицэрэн 氏に大変お世話になった。
- 87 「Ш」 というキリル文字は、ローマ数字 III の代用として使用される場合もあるが、このあとの「アクションヴォ- II 土壘」ではローマ数字 II が使用されているため、III の代用であるという確証が得られない。ここでは原文に従って、「キボ-クラル-Ш」としておく。
- 88 この情報は、ロシア連邦タタールスタン在住の口琴研究家ヴィクトル ベロフ Виктор Белов 氏にご教示いただいた。彼は、発掘された口琴に関する記事を 20 編ほど集めた論集（Белов 2018）の編者でもある。このオムスクの口琴に関して、ベロフの論集では、元の記事とはタイトルの表記が異なる（元記事：среднего Прииртышья > 論集：нижнего Прииртышья）。

- 89 原文では、0.02cm と表記。しかしながら、1mm の 1/5 の薄さとは考えられず、fig. 52 実測図の側面図を見ても、それほど薄さを表現されているとは思えない。おそらく 0.2cm(=2mm) の誤記であろう。
- 90 「チェックリスト (3)」(直川 2018) では、3 例の図版を掲載したのみである。詳しい記述は今後行う予定。
- 91 写真と実測図の番号のズレは、単純なミスだろう。
- 92 オリジナルの報告書では、二点の遺物は、もう少し関係が薄く感じられる、離れた状態でレイアウトされている。また、枠は縦位置で、弁? は横位置である(図中の数字を参照)。本稿では、縮尺を合わせることを主目的として、配置を変更してひとつの図版に収めた。
- 93 熟覧にあたっては、木更津市教育委員会教育部文化課、特に文化財係の酒巻忠史氏のお手を煩わせた。
- 94 酒巻忠史氏のご指摘による。

参考文献：

Белов, Виктор 編.

2018 Археологические варганы сборник статей. Елабужского Отделения Русского Географического Общества.

陳, 永志、吉, 平、張, 文平 主編.

2014 赤峰文化遺産. 文物出版社.

中国社会科学院考古研究所, 臨汾市旅游發展委員会 編著.

2018 中国陶寺遺址出土文物集萃. 天津古籍出版社.

Eckardt, P. Andreas.

1929 Geschichte der Koreanischen Kunst. Verlag Carl W. Hiersemann.

平野, 雅之 編.

1988 一千葉県木更津市一 花山遺跡. 財団法人 君津郡市文化財センター発掘調査報告書 第 38 集. 木更津市, 財団法人 君津郡市文化財センター.

黒竜江省文物考古研究所, 中国社会科学院考古研究所.

2006 黒竜江綏濱同仁遺址発掘報告. 考古学報. 第 1 期. p. 115-140.

Kolltveit, Gjermund.

2006 Jew's Harps in European Archaeology. Archaeopress, Publishers of British Archaeological Reports.

Коников, Б. А.

1996 Варган XI—XII вв. н. э. из среднего Прииртышья. Этнографическое обозрение. № 3. p. 63-65.

劉, 業萍 主編.

? 神奇神木. 陝西省神木県旅游局.

陝西省考古研究院, 神木市石峁遺址管理处 編?

2019 ? 石峁遺址.

直川, 礼緒.

- 2016 アジアの発掘口琴チェックリスト (1) : 薄板状の口琴 (1). 伝統と創造 東京音楽大学付属民族音楽研究所研究紀要. vol. 5. p. 57-70.
- 2017 アジアの発掘口琴チェックリスト (2) : 薄板状の口琴 (2). 伝統と創造 東京音楽大学付属民族音楽研究所研究紀要. vol. 6. p. 57-68.
- 2018 アジアの発掘口琴チェックリスト (3) : 薄板状の口琴 (3) と湾曲状の口琴 (1). 伝統と創造 東京音楽大学付属民族音楽研究所研究紀要. vol. 7. p. 55-66.

Төрбат, Ц.

- 2017 Эвразийн зүүн хэсгийн эртний нүүдэлчдийн археологийн дурсгалаас илэрсэн хэл хуурууд. Археологийн судлал. XXXVI. p. 169-180.

Шавкунов, Эрнст.

- 1989 Некоторые аспекты культурогенеза чжурчжэней в свете новейших археологических исследований. Новые материалы по средневековой археологии Дальнего Востока СССР. p. 5-11.

In this fourth part of the successive articles, Section 13a discusses the bow-shaped bronze Jew's harp from Shaiginsky hillfort, Primorsky Krai, Russia (7-8th century A.D.) more in detail, comparing it to hairpins. Section 14a is a complement discussion of the bow-shaped iron harp from Suibin County, Heilongjiang Province, China (5-11th century A.D.). Section 16 is a preliminary announcement of the new foundation, more than 20 lamellate bone harps from Shimaoye site, Shaanxi Province, China (20th century B.C.), and a report about the symposium held in Shenmu City, in September of 2019. Section 17 discusses the example of the same type from the Taoshi site, Xiangfen County, Shanxi Province, China (19th century B.C.). It is followed by section 18 about one more example from Chifeng, Inner Mongolia and section 19 about plucked harps from Omsky Oblast in Western Siberia, Russia (11-12th century A.D.). The last section 20 discusses the bow shaped iron harp from Hanayama site, Kisarazu City, Chiba Prefecture, Japan, a new rediscovery (excavated in 1983, recognized as a Jew's harp in 2019) from the end of 9th century A.D.

正誤表 :

直川礼緒 2016

アジアの発掘口琴チェックリスト (1) : 薄板状の口琴 (1). 伝統と創造 Vol.5

p. 68, 註 26

× ガリーナ ソルダートヴァ Солдато́ва Г.

○ ナターリヤ ソルダートヴァ Солдато́ва Н.

直川礼緒 2018

アジアの発掘口琴チェックリスト (3) : 薄板状の口琴 (3) と湾曲状の口琴 (1). 伝統と創造 Vol.7

- p. 55, 見出し12 × [52-56]
 ○ [52 ~ 56]
- p. 57, 見出し13 × ロシア連邦沿海地方 Altai Republic, Russia [101-105]
 ○ ロシア連邦沿海地方 Primorsky Krai, Russia [101~105]
- p. 58, fig. 31 × ニコラエフカ砦
 ○ ニコラエフカ-I 土塁
- p. 59, 見出し15 × [107-109]
 ○ [107 ~ 109]
- p. 63, 註 61 × fig. 2
 ○ fig. 29

(本学付属民族音楽研究所社会人講座講師、日本口琴協会代表)